

きのうまでの僕に、サヨナラ。

〜期間限定のフェイクな恋の物語〜

作 サワムラヨウコ

別れのときはいつも

男 〰〰
女 〰〰
友人(男)〰〰
店員(女)〰〰
アンズ 〰〰

無音。男のナレーションが入る。

男 ——— 今日で、他人になる。

音楽が流れた。物悲しくもなく、軽快でもなく、単調なリズムの音。
暫くしてSEのカフェのさわめきがフェードイン。

女 どういうことだっ？
男 だから、言っただろ？ ーというこどだって。

女 ーというこどだって……要するに浮気してたってわけだ。
男 浮気って、お前なあ、何度も言っただろ。——まあいいよ、浮気でも何でも。すきに強くてくれて。

何よ、その投げやりな態度。言い訳があるならはつきり言いなさいよ。ないよ。

ないって「こ」はないでしょうっ？！「こんな女連れてきていて。あんたも、黙ってないでなんか言ったらどうなのっ？！」

止めるよ、彼女に当たるなよ。

あら、随分やさしいのね、その人には。

彼女は何も悪くないだろ。

そうかしら？ 人の男寝取っておいて、どこにも非がないとでも言いたいのか？

人聞きの悪い言い方は止せよ。俺は、お前とは半年前に別れたつもりだったんだ。

私は別れたつもりなんてなかったわ。

あのと切り出したのはお前の方じゃないか。

あんなの、売り言葉に買い言葉じゃない。三年も付き合ってきたんだから、それくらい判るでしょっ？！

でももう、何回目だよ？ 別れる別れるって、喧嘩のたびに口癖のように言うて……もう、疲れたんだよ。

……この人とは、いつ出逢ったの。

一ヶ月前だよ。同僚の紹介で。

一ヶ月って……。よく知りもしない人と、すぐに付き合っちゃうわけだ。

……。

私、あれから何度もメール送ったよね？ 何度も電話かけたよねえ？ でもまともに取り合ってくれなかった。で、やっとついた連絡で直接会って話そうって今日

来たら、これだ。新しい女の人、連れてきちゃってさ。

……。

そこまでして、私と別れたらどうわけ？

……そうだよ、そこまでしても、お前と別れたかったんだよ。

女、大きく憤るような息をつき、勢いよく座席を立ち店を後にする。

SEカフェのドアの鐘がカランカラン、と虚しく鳴る。

少しの間後、オープニングの曲がフェードインする。

暫く流れた後、男のナレーションが入る。曲は流れたまま。

男

「彼女」と出逢ったのは、本当に同僚の紹介だった。

おれはその時、長年付き合ってきた恋人と別れるのに苦労していた。喧嘩が絶えなくて、しようちゅう別れ話を切り出されて、でもまた戻って。相手との未来が思い描けないのに一緒にいる「こ」にも疲れていたし、やっと別れを決心したのに今度は手のひらを返したかのよう「こ」に復縁を迫ってくる相手にも困っていた。

このままだとまた先の見えない元の関係に舞い戻ってしまうんじゃないか。そう危惧していたとき、彼女と出逢ったんだ。

SEI居酒屋の騒めき。

友人 おー、来た来た。こっちこっち！

男 遅くなってごめん。

友人 ほんとだよ、もうビールぬるくなっちゃったよー。あ、この人が噂の新しい彼女？！

男 あ…うん。

アンズ 初めまして、アンズと申します。

友人 アンズさん！ 素敵な名前ですね！ あ、おねえさん、生中三つ追加で。
店員 はいよー！

店員の声・居酒屋の騒めきともにフェードアウトしながら消える。

男、ナレーション。

男 正直、なんだってよかったし、誰だってよかった。おれに優しくて、一緒にいてくれて、三年付き合っていた恋人を思い出すことが無いように時間と心を埋めてくれる人であれば。

だからアンズは、都合がよかったんだ。

音楽、切り替わる。

アンズ ねえ、たまにはどうか遠出してみない？

男 遠出って？

アンズ デイズニードランドに行くとか。

男 ちよつとちよつとちよつと！ アンズちゃん、あなたおれが金出すからって、無茶言おうとしてるでしょ？！ せめて日帰りで行けるよ！こっちよ！

アンズ ちっ。やっぱ無理か。

男 あ、いま「ちっ」って言ったね？ 凶星？ 凶星だったんだ？！

アンズ 違うよー、予想の範疇だったよ、お金ないのは知ってるからね。

男 そーですよね…おれ、お金ないしね…。

アンズ でもさ、本当にどうか行こうよ。水族館とか、動物園とか、何でもいいから。

男 いいけど…何で？ アンズちゃん、そんなにおれに時間割いちゃっていいの？

アンズ キミはそんなこと、気にしなくってもいいの…これは私が決めることなんだから。言ったでしょ、最初に。

男 まあ……ね。

アンズ ……やっぱりね、もつと恋人らしいこと、したほうがいいと思うんだ。

男 おれ、そんな落ち込んでるように見える？

アンズ 見えないよ、今はね。でも、後からきつと来ると思うの。押し寄せるように、どつとね。だから、その時のために、何か心の支えになるような新しい思い出を作つてあげたいなあって思つて……思い出を、塗り替えるのよ。新しい記憶で。

男 思い出を塗り替える、か。そうだね、そうした方がいいのかもしれない。うん、

じゃあ週末の土曜は、水族館に行こう。

アンズ 土曜って、あさつてじゃん。随分急だね。ちゃんとデートプラン立てれるのお？

男 そこは「心配なく！」ばっちり素敵なプランを立ててエスコートさせて頂きますよ、アンズ嬢。

アンズ フッフ。じゃあ、楽しみに待ってる。

音楽、切り替わる。男、ナレーション。

男 おれたちには時間がなかった。限られた時間の中で、出来るだけたくさん思い出を塗り替えなければならなかった。毎日メールして、可能であれば電話をかけて、週に二回は仕事帰りに食事に行つて、週末にはデートを計画した。お金はたくさん持ってなかったけれど、デートプランは出来るだけしっかりと立てた。それはアンズからの条件でもあったし、時間を費やすことは実際おれにとつても助かることだったんだ。「こ」でケチつたら意味が無くなる。「この」恋」のようなものに、必死にならなければならない。

SME電話の着信音。

女 やつと出た。ねえ、まだ怒ってるの？ 言ったよね、別れるなんて嘘。本気にしない。
い。

SUMメールの受信音。

男 前にも言いましたが、もう連絡はしてこないで下さい。今の彼女を傷つけたくはない。

SME電話の着信音。

女 新しい彼女がいるなんて、嘘なんですよ？ あなたはそんなすぐ誰かと付き合えるような人じゃないって、私知ってるのよ？

SE風の吹き去るような音、長引いて。
BGMに静かな音楽が流れる。

アンズ だから、あたしみたいな人間が必要とされるのよ。

男 はあ……なるほど。男って、バカですね。

アンズ 純粹なのよ。女より。

男 ……じゃあ、一ヶ月間で、お願いできますか。

アンズ 契約、成立ね。

音楽が切り替わり、無音になる。

SEカフェのざわめきがフェードイン。

冒頭のカフェのシーンの最後へ戻る。

女 そこまでして、私と別れたらいいわけ？

男 ……そうだよ、そこまでもしても、お前と別れたかったんだよ。

女、大きく憤るような息をつき、勢いよく座席を立ち店を後にする。

SEカフェのドアの鐘がカランカラン、と虚しく鳴る。

暫しの沈黙。

今までのカップルのような雰囲気が消え、かしまった感じで男が切り出す。

男 一ヶ月間、ありがとうございました。

アンズ これで、よかったの？

男 はい。こうでもしないと、彼女も僕も前へ進めなかったんで。よかったんですよ。

あなたのお陰です。

アンズ あたしは契約通りの仕事をこなしただけよ。

男 そうですね。でも僕は、あなたに会えてよかった。

アンズ そう言ってもらえると、光栄だわ。

オープニングの曲が流れたす。

男のナレーションが入る。

男 これが彼女と交わした最後の会話。その後、おれたちは別々に店を出た。

——タイムリミットは一ヶ月間。契約した期間だけは希望通りの恋人を演じてくれるという、ちよっと変わったデート嬢のアンズ。おれは、長く付き合った恋人と縁を切りたくて彼女を雇った。

あれ以来、元恋人からの連絡はなくなった。目的は達成された。達成されたのに……おれはもう一度、彼女の声が聴けないかと、携帯電話のディスプレイを眺めている。もう、二度と掛かってくることのない電話。寂しい夜は、塗り替えた記憶を懸命に手繰り寄せる。毎日したメール、週に二回は仕事帰りに行つてた食事のこと。そして、一緒に水族館に行ったこと。頭では判つてる。それは、ルール違反だつて。……今日で、他人に戻つたんだから。

流れていた曲、ポリウムアップ。しばらくそのまま流れる。
キャスト、スタッフをナレーションが読み上げて、曲が自然に終わる。

END